

【巻頭言】

冬季平昌オリンピックに寄せて

小柴 朋子

文化学園大学服装学部

春らしい季節がやってきました。今季の冬は例年になく厳しい寒さでした。

厳冬の中、お隣韓国では平昌オリンピックが開催され、多くの日本人選手が活躍しました。どちらかというと室内競技のスケートやカーリングなどの競技で優れた成績があげられたように思うのですが、少し暖かくなってきたパラリンピックでは、スキー滑降など戸外競技でも、めざましい活躍をあげる選手の皆さんのが報道されています。

いろいろ印象に残ったオリンピックではあります、その中で気になったシーンがありました。スキージャンプ競技において、ジャンプ台のスタート地点で風の向きが好転するのを震えながら待機している選手の姿です。毛布のような布を肩にかけ何秒かを待つ様子が放映されていましたが、寒さはしのげなかろうと、思いました。選手を寒さから守れない競技は過酷で、力量を発揮できないのではと、心配になりました。自然条件も含めて競技なのでしょうが、せっかくの競技ウェアの開発も、選手のパフォーマンス向上を目指し、いろいろ配慮すべき点が他にもありそうだという感を強くしました。

さて、2020年には、東京オリンピックが酷暑の中、開催されます。今から、選手、観客、競技関係者、ボランティアの方々の熱中症対策として、様々な方面で検討が重ねられているようです。第2回家政セミナーとして開催された平成29年度の被服衛生学セミナーでも、生活の質的向上を目指す家政学の世界一オリンピック・パラリンピックがつなぐユニバーサル衣料の未来ーがテーマとして取り上げられました。信州大学教育学部の三野たまき先生のお骨折りにより、被服系4部会合同担当という調整が大変にも関わらず成功裏に、大きな成果をあげていただきました。

平成30年度の被服衛生学セミナーは、東京の

共立女子大学で開催されることとなりましたが、今回も暑さに対する人の反応、衣服の在り方について、実行委員長の丸田直美先生を中心に、各分野の先生方による講演が計画されています。部会員の皆様と共に研鑽を深め、研究成果がより社会に還元できるようにしたいものです。猛暑の中でのオリンピックに対し、被服衛生学からの知見が安全で高い成果をもたらし、成功したと後世に伝えられるようにできればと思います。

部会員が参考できる機会は、5月の家政学会大会と、夏のセミナー、また公開講座と限られてはおりますが、いずれも充実した内容で回を重ね、今年で日本家政学会は70周年を迎え、また被服衛生学セミナーも、37回目となりました。残念ながら、5月の家政学会は、被服衛生学分野の研究発表が減少傾向にあり、特に口頭発表が少なくなっています。被服衛生学部会総会が開催される時でもあり、多くの部会員の皆様方の参加が望まれるところですが、発表申し込み時期が学年末の大学の忙しい時期にあたり、なかなか参加者が増えないことが部会としての課題です。

一番研究領域の近い先生方同士で、質の高い質疑討論できる機会は大変貴重だと思います。今年は公開講座も企画されていますが、研究が研究のためだけに行われるのではなく、社会に還元、貢献できるよう、部会の体制整備や仕組みづくりをしていくことが必要でしょう。部会員の皆様と、一つ一つの企画が形骸化せず、意欲的に改革され、若い研究者の発掘につながることを意識していきたいものと思っております。

<連絡先>

〒151-8523 東京都渋谷区代々木3-22-1
文化学園大学服装学部 小柴 朋子
電話：03-3299-2336 FAX：03-3299-2336
eメール：koshiba@bunka.ac.jp